

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 教授

氏名 藤井洋子

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

役職担当：小動物外科学研究室担当、小動物診療部門構成員、獣医外科学特論等、大学院科目のコーディネーター

自分が担当している授業科目：自身はアメリカ獣医内科学会心臓病専門医の有資格者

(Diplomate of American College of Veterinary Internal Medicine (Cardiology)) であるが、座学として小動物臨床麻酔学、小動物心臓病学、実習として動物病院循環器科診療担当者として循環器科ローテーション学生に対する臨床教育、外科実習分野を担当している。

教師として何に責任を負っているか：獣医師として以前に、人としての誠実さ、人間力を備えることが臨床獣医師として知識よりも重要であることを伝えること

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
小動物獣医総合臨床I-IV	獣医学科	必修	5	150
小動物病院実習	獣医学科	選択	6	1
獣医総合臨床実習（外科実習）	獣医学科	必修	5	150
小動物臨床実習	獣医学科	必修	5	150
基礎・小動物獣医総合臨床III	獣医学科	必修	4	150
獣医学特論I	獣医学科	必修	5	4
獣医学特論II	獣医学科	必修	6	4
卒業論文	獣医学科	必修	6	4
獣医外科学特別演習II	研究科獣医学専攻	必修	2	1
獣医外科学特別演習IV	研究科獣医学専攻	必修	4	1
獣医外科学特別実験II	研究科獣医学専攻	必修	2	1
獣医外科学特別実験IV	研究科獣医学専攻	必修	4	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

獣医師として高いプロフェッショナリズムを備え、社会に貢献するためには、確かな科学的思考力が不可欠であると考えている。臨床の現場においても、基礎医学、病態生理学、臨床薬理学を深く理解し、臨床論文を批判的に読み解き、診療に応用できる獣医師を育成したい。また、クライアントやスタッフと円滑に意思疎通を図り、チームとして最善の医療を提供できる姿勢も重要である。

私は、学生や若手獣医師が主体的に学び、根拠に基づいて判断する力を養えるよう導くことを教育の軸としている。さらに、海外にも積極的に目を向け、自ら可能性に制限を設けず挑戦し続ける姿勢を育むことを重視している。将来、教育や研究、臨床の場で自立して活躍できる人材を育てることが、私の目指す教育である。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

【学部学生に対する教育】

- ・座学ではあっても、病院で実際に診察した症例を提示し、具体的なイメージが湧く様にしている。
- ・外科実習前には予習用動画（短め）を學理にアップし、実習がイメージできる様にして実習に臨めるようにしている。これにより実際の実習時にデモを行う必要がなくなり実習時間を有効に使用できていると思う。
- ・実際の症例は教科書通りではなく、個々それぞれ異なりそれに対応する必要があること、獣医療はオーナーmatterを含んでいるため同じ様な症例でも異なる対応が必要であること、数学的な正解がある様な分野ではないこと、などを症例ラウンドで話すことで、学術的なことだけが重要なのではないことを伝えられる様にしている。

【大学院生への教育】

- ・興味のあるような課題は投げるが、初めからこちらの仮説や考えは述べず、まず本人が課題について調べたり考えたりしたのちにディスカッションしている。このことで、自ら調べ、考え、計画する能力が身についていくのではと考えている。

（1）アクティブ・ラーニングについての取組

有

小動物の病院における臨床実習では、まず簡単な質問を投げかけ、その回答を通じて学生の理解度を把握し、個々に合わせた指導を心がけている。また、単なる見学にとどまらず、学生が能動的に考える機会を持てるよう配慮している。

卒業論文の指導においては、こちらから一方的に課題を与えるのではなく、まず学生自身の関心のあるテーマについて問いかけ、自らリサーチを行うよう促している。その後、ディスカッションを重ねながら、さらに深くテーマを探求し、研究プロトコルの策定へと進めるよう指導している。

（2）ICTの教育活用

有

ICTを活用した教育の一環として、LMS (Azamoodle)を用いた事前学習資料および復習用動画の配信を行っている。学生が授業前に基礎知識を整理することで、授業時間をより発展的な内容や議論に充てることを可能としている。あわせて、講義直後に小テストを実施し、学生自身による理解度の確認と、教員側による学習状況の把握を通じて、指導内容の改善に活用している。

さらに、学部学生向けおよび大学院生・研修獣医師向けのジャーナルクラブをオンラインで実施している。使用する論文や資料およびジャーナルクラブの録画動画をクラウド上にアップロードし、参加者がいつでも閲覧できる環境を整えている。これにより、時間や場所の制約を超えた継続的な学習と議論を可能とし、論文を読み解く力や、エビデンスに基づいて意見を構築・共有する能力の育成を図っている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

基礎科目の復習を促し、臨床科目につなげる様な思考回路が必要であることを伝える努力をした。

試験では、単なる暗記では解答できない問題を出題し、臨床に必要な生理学・薬理学・解剖学の復習を促すよう工夫した。国家試験においても、単なる暗記からの脱却を求める傾向が強まっていることから、今後もこのような出題方法を継続したいと考えている。

(2) 学生の理解度の把握

B

病院実習では、学生それぞれの興味や実習への熱意に応じて、内容やディスカッションの深さを調整しながら進めた。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

上記にも記載したが、LMS (Azamoodle)を用いた事前学習資料および復習用動画の配信を行っている。授業においても、基礎科目を理解することの重要性と復習を促す発言を繰り返し行なった。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

授業に対する質問は対面、メールで受付する旨を授業終了時に毎回発言した。その結果、封筒数の学生からメールによる質問があり、それに対する返信は1日以内に行なった。

(5) 双方向授業への工夫

B

座学における配布資料では強調するマークはつけないものを配布し、授業において重要な部分を強調するスライドに差し替え、重要点を認識してもらう様にした。座学では一方向性になりがちであるが、病院実習では課題を与え考える時間を設けたのちにディスカッションする様にした。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

B

今年度はV6総合獣医学の授業担当から外れたことから、V5、V4の授業における取り組みは以下の通りである。

V4の授業では、国家試験に出題された内容であることを具体的に伝え、重要な項目について意識させるような工夫をした。前述のごとく、国家試験は暗記だけでは解けない問題が多いことから、勉強の仕方の意識改革になる様に、授業内容の背景にある基礎科目（生理、薬理、解剖など）がどのように臨床獣医学に繋がっていくのかを考えさせるようにした。

V5の病院実習においては、過去に出題された疾患に遭遇した場合は国家試験で取り上げられた疾患であることを伝え意識させ、あわせて国家試験では外せないポイントを口頭で伝えることを心がけた。ただし、国家試験のためだけの、試験対策授業にならないように、自分はいくまで臨床獣医師として誇れる仕事ができるような職業人を輩出できることも意識している。国家試験の予備校にならないようにしたい。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

担当している授業がオムニバスであり、自分に直接的な評価がなかったことから、この設問には答えられない。授業評価ではなく、研究室学生に直接試験の難易度や授業について感想聞いたりし、それを参考にした。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

研究室学生の意見からは、改善すべき点は見出せなかった。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

今年度の方法を踏襲したい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

暗記に頼るのではなく、理論から理解し、応用できるように授業を構築した。

卒業論文においては、教員が初めから課題を与えるのではなく、学生が自身の興味のある分野からどのような研究が考えられるかを主体的に思考するよう促した。そのうえで、学生自身がまずリサーチを行うことを重視し、行き詰まった場合には適切なヒントや情報を提供しながら導くよう努めた。その後、再度ディスカッションを重ね、研究プロトコルの立案から進行までを双方向の対話を意識しながら進めるようにした。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

- ・担当する大学院生がJournal of Veterinary Medical Scienceにレビューを公表した
- ・担当する大学院生が、American College of Veterinary Internal Medicine annual meeting2025でポスター発表した
- ・担当する大学院生が、American College of Veterinary Internal Medicine annual meeting2026の口頭発表に応募する予定である
- ・担当する大学院生が、日本獣医循環器学会で口頭発表を行った
- ・担当する大学院生が、神奈川県獣医師会学術大会で学術奨励賞を受賞したため、関東・東京合同地区獣医師大会・三学会で口頭発表した

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

私の教員としての役割は、入学者を増やすことではなく入学した学生がプロフェッショナルリズムにあふれた獣医師になるようにルールを敷くことである。したがって高校予備校からの情報や入学者の確保に関するFDに時間を費やすことは非効率であると感じる。一方で、大学教育に有用と考えたFDについては積極的に参加したつもりである。診療業務に時間を費やすことが多いことから、見逃し配信を引き続き希望する。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

大学院生に対する目標

短期目標は、担当する大学院生が自身の興味領域において「銀の弾丸」となり得る成果を創出し、小動物循環器病学の発展に実質的に貢献できるよう支援することである。

長期目標は、輩出した人材が社会において専門性を活かしつつ、次世代を育成する立場としても活躍し、広く社会に貢献できる人材となることである。

学部学生に対する目標

短期目標としては、状況を冷静に観察し、収集した情報をもとに問題を解決していく応用力を身につけた人材となるよう教育することを掲げる。

また、Evidence-Based Medicine (EBM) のみならず、Narrative-Based Medicineの重要性についても学生や研修医に伝承する。すなわち、科学的根拠に基づくディスカッションに加え、オーナーの話に傾聴する姿勢や経済的背景への配慮など、臨床現場ではEBMだけでは完結しない多面的な判断が求められることを、実感を伴って理解できるよう指導したい。

長期目標は、高いモチベーションを持ち続け、臨床獣医師として社会に貢献できる獣医師を育成・輩出することである。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

シラバス、レポート課題、試験問題、教材（配布資料、パワーポイント資料）

FDプログラムへの参加記録

授業に関する学生からの質問のメールのやり取り